

愛知県ヒロノ遺跡の諸磯 C 式古段階および中期末遺構の 炭素 14 年代

増子康眞

年代測定の狙い

縄文時代を通して際立つ現象の一つに、関東以西の沿岸に前期後半・諸磯 C 式土器段階の貝塚が極端に少なく、遺跡の絶対数も乏しい。東海地方でも同様に当該期の貝塚は存在せず、沿岸とそれに続く平野部では遺跡もほとんどなくなる。この現象を惹起した理由は何かが課題として存在する。

関連して遺跡が少ないため諸磯 C 式の年代測定例は乏しい。(今村・辻・春成 1994)で示唆されたように、これまで行われていたおおまかな年代枠の設定ではなく、編年上の各型式の継続時間を視野に置いた新しいデータ集積のため、短期間にパックされた信頼のできる資料としてぜひ測定したいと考えた。

加曾利 E 式段階の東海地方における筆者の編年は関東・中部山岳との比較に適合する部分が多いと考えるが、加曾利 E 3 式平行と理解している取組式土器住居址のデータは上記の目的に沿う信頼度の高い資料と評価した。以上が中村俊夫氏に共同研究として測定をお願いした理由である。

ヒロノ遺跡の概要

本遺跡は愛知県の北東端に位置し、長野県下伊那郡と岐阜県恵那郡に隣接する。矢作川の支流である野入川の段丘面(標高 478m。北緯 35° 14' 51"、東経 137° 32' 15")に立地し、縄文前期後半～後期前葉まで継続的な居住が認められる。2 回の調査によって 10 軒の竪穴住居址、埋葬と推定される土壌 13 基、同深鉢 3 を検出している。今回(第 2 次)調査では前期後半と中期末の住居址および炉穴各 1、および埋葬土壌を検出し 1999 年報告書を刊行している。縄文前期後半に始まり中期後半に最盛期を迎える矢作川(根羽川)流域の定住型基幹集落の一つと評価できる遺跡である。前期後半としては矢作川(根羽川)やや下流の岐阜県側に久武瀬遺跡が有力な遺跡としてある以外、定住型の遺跡は他に検出されていない。

第 2 次調査の契機は N T T 東海移動通信網会社の電波中継施設建設に伴う事前調査として、稲武町教育委員会が主体者、増子が調査担当となり 1998 年 8 月に実施した。

炉穴：遺跡の南西において、斜面下方に直径 1.5m 深さ 1.3m の土壌を掘り、その下底から斜面上方へ向けて長さ約 1 m の煙道をトンネルとしてつくる。焚口である土壌下底部分の煙道は横幅約 1 m 高さ 40cm、テーパー状となる末端の煙出しは幅 50cm でその周辺の地面は平坦に加工される。全体の長軸 2.3m である。報告では軸方向を南北と書いたが、正確には南東—北西が正しいので訂正する。煙道の傾斜は焚口付近から約 30 度で立ち上

がり、中央付近では 20 度、煙出し付近から再び約 30 度となる。煙道の東側は崩壊があるがトンネルの旧状は比較的良好に残され、煙道内と焚口の中ほどまで細かい炭化物と灰を含む黒灰色サバ土が充満していた。

トンネル状の煙道を備えた炉穴は早期押型文土器段階の例が三重県に、稲武町では子種遺跡に早期後半の元野～粕畑式段階の類例が報告されている。用途は明確ではないが薫製施設という推測があり、煙出し周辺を注意して探査した。地山を平坦に加工した痕跡はあったが、柱穴等建物の存在を証明する遺構は確認できなかった。

炉穴内の遺物：21 個体分の縄文前期土器破片と石器 11 例が存在した。土器は数片の中期後半の細片資料を含むが、発掘時の混在と推定される。土壙部分には多くの川原石が存在したが、それらは炉穴の廃棄後に投入されたと推測できる状況であった。

土器は黒灰色サバ土層中に含まれ、完形品はないが比較的大形の破片を含む。破断面は新鮮で器面には厚いスス状炭化物に覆われたものもある一方、表面剥離が目立ち保存はかならずしも良好ではないが、二次的移動の痕跡は少ない。

土器の特徴は比較的薄い器壁の縄文を多く用いる A 群と、集合沈線の特徴とする比較的厚手の B 群に大別した。A 群は東海西部(愛知・岐阜)に主体的に分布する大麦田Ⅲ a 式土器である。ヒロノ炉穴資料の過半数を占めており、A 群の半数は縄文以外に文様のない単純な深鉢形の粗製土器、半数は数条の細い粘土紐を口縁部に貼付して文様とする精製土器である。後者は粘土紐の上に縄を回転し縄文施文する例が多く特徴である。

B 群は関東から中部山岳地帯に分布の中心を持つ、半截竹管集合沈線帯文を主とし貼付の少ない諸磯 C 式土器の最も古い一群に類似する。ヒロノ炉穴土器の約 1/3 を占める。

石器は土器と同じく黒灰色サバ土層中に含まれ、矢作川床に存在する玄武岩を素材とする小形打製石斧と石核・礫器、花崗岩の平盤石皿と磨石、流紋岩の石匙、黒曜石の使用痕ある剥片からなる。段丘上に存在する前期後半一般の石器組成と変わらない。

縄文中期末住居址：南北長が 5.1m の隅円方形プランの竪穴住居址。床面中央に方形石囲炉（北側の石列の東西端に石棒を埋立している）がある。住居址床面上は 4 層の覆土からなり、方形石囲炉の真上に 30 年を越えるクリが植えられていたが、断面図に記録したように、各々の堆積状況は後世の攪乱を認めない。

遺物は層位的に取り上げ分離して報告した。周溝・炉内の土器と、覆土層の土器には微妙な差違がある。覆土層の土器群は縄の結節を回転する下伊那タイプが多く、結節回転のみの新しい要素が目立つ(神村 1978)。ただ口縁部文様区画帯を残すものがあり、本遺跡で結節回転が消失している土壙 S K 10(中期最末=山の神Ⅱ式)よりは古い。

炉内と周溝内の土器は 10 片中 2 片に結節回転があり共に縄文を併用する古いタイプであること。胴部懸垂文に縄文を多用することから取組式段階に比定することができる。また覆土層にはない唐草文系土器の二条 1 単位の隆帯文土器を伴うこともこの推定を裏付け

するであろう。以上の詳細は文献 2 を参照。

測定の結果

測定を依頼した資料の内、保管してあった炉穴の煙道中央付近西側の黒灰色サバ土層下部サンプルからピンセットにより微細炭化物をピックアップした資料は、炭素 14 年が 4830 ± 60 (yr BP) 較正した年代が Cal BP 5590 (NUTA2-135)。

S B 2 方形石囲炉内の炭化物(木の枝?)は、炭素 14 年が 4260 ± 60 (yr BP) 較正した年代は Cal BP 4830(NUTA2-134)。以上の測定結果を 2000 年 4 月 19 日付の中村氏のお手紙にてご教示いただいた。

これらの炭素 14 年数値は、岡谷市大洞の十三菩提式平行で 4870 ± 110 (I-13830) 5250 ± 110 (I-13829) のデータがあり、下伊那郡増野新切 14 号住 4160 ± 105 (GaK-13829) は取組式よりほぼ二型式古い火災住居址と推定される。以上参考資料を掲げておく。

謝辞：加速器質量分析測定法の援用による精細な年代測定データの集積に数少ない最適な資料と確信して、炭素 14 年代測定を共同研究としてお願いし、これに応え頂いた中村俊夫氏に感謝いたします。

この分野のデータの集積は、同時存在の住居址数の解明など全く新しい展望をもたらす可能性が強い。熟練した土器屋の協力が不可欠であり、同学の士に積極的にデータを増やすよう呼びかけた。

(2001. 3. 24 了)

引用・参考文献

1. 増子康真 1995 『愛知県北設楽郡稲武町ヒロノ遺跡緊急調査報告書』稲武町教育委員会(愛知県)
2. 増子康真・坂野俊哉 1999 『愛知県北設楽郡稲武町ヒロノ遺跡第 2 次調査報告書』同上
3. 今村峯雄・辻誠一郎・春成秀爾 1999 「炭素 14 年代の新段階」考古学研究 183 号 PP.90~100 考古学研究会(岡山市)
4. 宮下健司 昭和 63 年「長野県における考古科学の成果」『長野県史・考古資料編・全 1 巻(4)遺構・遺物』PP.1052 長野県史刊行会(長野市)

Carbon-14 Ages of Charcoal Samples from a Firehole Remain of the Early Face Moroiso-C-type Pottery Stage and a Hearth Remain of the Torikumi-type Pottery Stage at Hirono Site in Aichi Prefecture

Yasumasa Masuko